わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 72

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

孤独死は不幸？

老若男女問わず、ひとり暮らしの人が増えている。

「おひとり様」の表現はすっかり定着したし、ファミリーレストランではなくひとりで食事ができる形態の店が増えてきた。特に都会でその傾向は顕著だが、最近は過疎化地域でもぼちぼちと目だってきたという。

一方で、「孤独死」の報道も目立つ。ウィキペディアの定義によると、誰もが納得する孤独死の定義はないとしつつ、あえていえば「ひとり暮らしの人が誰にも看取られる事無く、当人の住居内等で生活中の突発的な疾病等によって死亡する事」とある。住居内で、というのがひとつのキーワードであり、身寄りのない人が病院で亡くなるときには孤独死とはいわないのだとか。また、「疾病等で」となっているものの、住居内で自殺した場合でも孤独死と呼ぶらしい。

ニュースで取り上げられるのは、ひとり暮らしの人が亡くなって、その発見が遅れた場合である。狭い部屋や異臭漂う様子が生々しく報道されれば、孤独死とは悲惨な死に方だという印象ばかりが残ってしまい、ああはなりたくないと思う安易な感情を生む。

では、孤独死とは、本当に不幸でかわいそうな死に方なのだろうか？

たまたま死んだことの発見が遅れてしまったにせよ、そのこととひとりで死にゆくこととは違うような気がする。孤独死と表現することで、マイナスのイメージだけが強いえば、自殺はひとり暮らしの人よりも家族と同居の人に多いという。これは結構意外な事実ではないだろうか。ひとり暮らしであることが孤独で、家族と同居しているのは孤独ではないといった勝手な思い込みで物事を捉えていると、思わず否定したくなる現実だ。しかし、ひとりで暮らしているより、むしろ家族と一緒に生活しているときに生じる家族の発言や行為（たとえば、高齢者だけ留守番させて皆で旅行に行くとか、食事を別々に食べるなど）によって高齢の人々が居場所をなくし、絶望感や寂寥感に襲われる、これこそが真の孤独なのだといえるのではないか。上野氏は、ひとり暮らしは確かに寂しさを覚えるが、そこには、何ものにも代えがたい「自由」がある、という。まさしくそのとおりだと思う。ひとり暮らしの人は孤独で、家族と一緒だとハッピーという、いわば「家族という名の幻想」をベースにした報道内容は、間違った思い込みと見当違いな同情を引き起こすだけである。

私の周囲にもひとり暮らしの人はたくさんいる。ずっと未婚の人、既婚を脱して未婚の人などいきさつは実に色々だが、「現状ひとり、たぶんこれからも」という男女は多い。

老後の不安は、何人家族がいようが既婚だろうが同じこと。ならばひとり暮らしイコール孤独だと決めつけないでもらいたい。たとえ誰かに看取られたとしても、死ぬときはどうせ誰もがひとりなのだから…。とは、誇り高い彼らの共通した主張でもある。

イラスト・三浦義雄